

平成 26 年 5 月 31 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2010～2013

課題番号：22242011

研究課題名(和文)日本語のアクセントとアクセント類型論

研究課題名(英文)Japanese Accent and Accent Typology

研究代表者

窪園 晴夫(Kubozono, Haruo)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・構造研究系・教授

研究者番号：80153328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 35,400,000円、(間接経費) 10,620,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は世界の諸言語(とりわけ韓国語諸方言、中国語諸方言、アフリカのバンツー諸語)と比較することにより類型論的観点から日本語諸方言のアクセントを考察し、その特質を明らかにすることである。この目的を達成するために年度ごとに重点テーマ(借用語のアクセント、疑問文のプロソディー、アクセント・トーンの中和、アクセント・トーンの変化)を設定し、それぞれのテーマについて諸言語、諸方言の構造・特徴を明らかにした。これらのテーマを議論するために4回の国際シンポジウムを開催し、海外の研究者とともに日本語のアクセント構造について考察するとともに、その成果をLingua特集号を含む国内外の研究誌に発表した。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this project was to examine the prosodic structures of Japanese dialects in comparison with those of other languages of the world, including Korean, Chinese and Bantu, to clarify the characteristics of Japanese from typological viewpoints. To achieve this goal, we set up a special theme for each year (loanword prosody, question prosody, accent/tone neutralizations, and accent/tone changes) and discussed these topics at the four international symposia we organized in Japan. We summarized our findings in many academic papers and published them in various journals in and outside Japan, including the special issue of Lingua (2012, No. 122).

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：アクセント トーン 言語類型 日本語 中国語

1. 研究開始当初の背景

日本語はアクセント体系の宝庫と言われるほど、諸方言に多様なアクセント体系が存在している。隣接する韓国語諸方言との類似性は言うまでもなく、アジア・アフリカの声調言語に近いアクセント体系もある一方で、語アクセント的特性を持たない体系(無アクセント体系)もある。しかし諸方言のアクセントについて調査研究が進む中、通言語的視点からの分析は遅々として進んでいない。現在、世界の言語研究の中で日本語の音韻研究に求められているのは、日本語諸方言のアクセント体系を世界の諸言語と対照して、相対的に位置づけようとする努力である。そして、このような対照言語学、言語類型論的な視点から分析した日本語アクセントの研究成果を、広く世界に向けて発信することである。

2. 研究の目的

日本語はアクセントの宝庫と言われるが、実際、世界の言語に例を見ないほど、諸方言に多様なアクセント体系が存在している。ではアクセント体系から見た時、世界の言語の中で日本語はどのような言語なのか、また、日本語の研究が韓国語をはじめとする他の言語のアクセント分析や言語類型論研究にどのようなインパクトを与えるのであろうか。これらの重要かつ未解決の問題を、日本語諸方言のアクセント研究者とアジア・アフリカ諸言語のアクセント・声調研究者の力を結集して解決しようとするのが本研究の目的である。本研究は、日本語諸方言のアクセント体系を世界の言語の中に位置づけ、日本(語)のアクセント研究の成果を広く世界に向けて発信する。

3. 研究の方法

本研究の根幹を成すのが、(i)日本語諸方言のアクセント調査、(ii)方言音声データのデジタル化と公開、(iii)アクセント調査データの理論的・類型論的分析、(iv)研究成果の世界への発信、以上4つの柱である。(i)については絶滅危機方言とされる方言について追加のアクセント調査を進めるとともに、(ii)本プロジェクトのメンバーによってこれまで蓄積された音声録音資料のデジタル化と、その公開を図る。(iii)については、研究会を年に3回開催し、アジア・アフリカ諸言語のアクセント研究者とともに調査報告を議論する形で日本語アクセントの分析を進める。(iv)に関しては、毎年、年度末に海外の研究協力者を招いて国際シンポジウム(会議言語は英語)を開催し、日本語諸方言のアクセント分析を発表する。また合計4回開かれる国際シンポジウムの成果を英文論文集にとりまとめ、海外の出版社から出版する。

4. 研究成果

(1) 平成22年度

初年度は複数のアクセント類型論を踏まえ

た上で、日本語諸方言および韓国語、中国語バンツー諸語のプロソディー体系の位置づけを考察した。その成果は定期的な研究会および12月に開催した国際シンポジウム(ISAT 2010)で発表した。またウェブ公開に向け、収集した音声データのデジタルファイル化作業を進めた。言語・方言ごとの成果は次の通りである。

甑島方言(鹿児島県)について現地アクセント調査を行い、文レベルでHigh tone消去が起こる条件とその要因を明らかにした。また英語に見られるリズム規則との共通性を指摘した。

ウガンダ西部のニョ口語の動詞の変化形と声調との関係について、多様な変化形の声調パターンが1つの型に集約できることを明らかにした。ただその場合、統語的な条件が幾つか必要なことも明らかにした。

中国語の声調・アクセント・リズムをテーマとして、若手研究者を中心とした研究会を2回開催し、通時的研究も含め6本の研究について、詳細な議論を行った。

加計呂麻島(奄美)における2型アクセントの調査を実施しデジタル音声データを収集した。昨年調査した上甑島(鹿児島県)のアクセント調査の音声データの一部をデータベース化した。

石川県白山市白峰方言を調査し、動詞アクセント体系と日本語アクセント史との関連を明らかにした。

中期朝鮮語のアクセント体系について新たな音韻論的解釈を示した。さらに、現代慶尚道大邱方言との対応について両者の間にアクセント核の性質の違いはあるものの、ほとんど同じアクセント体系であることを明らかにした。

(2) 平成23年度

特に借用語のアクセントと疑問文のプロソディーに焦点をあてて分析を行った。研究成果は国際会議ICPP 2011をはじめとする国内外の学会・会議で発表し、また国内外の研究誌に投稿した。各分野の研究実績は次のとおりである。

外来語の中でもアルファベット頭文字語のアクセントがどのように決定されるかという問題を、鹿児島方言、甑島方言、喜界島方言をはじめとする日本語諸方言について分析しそこに知覚上の原理と母方言のアクセント構造の2つが制約として働いていることを明らかにした。

ウガンダ西部のバンツー系ニョ口語の現地調査を行い、動詞の変化形における声調の働きを調査した。その際、バンツー語研究において今まであまり考慮されることのなかった関係節の声調や否定形における声調を詳しく

考察した。

「中国語諸方言との対照研究」の領域では2回の研究会を基軸に、山西方言、呉方言等のTone sandhiの類型的な位置づけ、声調調値変化の実態、周辺言語の漢語受容にみられる声調変換等の問題を検討した。

隠岐島の複合語についての調査を行い、前部要素が複合語アクセントの決定に関与しているという事実を発見した。また、隠岐島五箇方言のデジタル録音データを収集した。あわせて、弘前、秋田（由利本庄市）など東北における昇り核を持つ方言を調査して、東京方言と比較した。

従来N型アクセントは隠岐諸島より東のものは知られていなかったが、福井県嶺北地方にも2型あるいは3型のN型アクセントが存在することを明らかにした。

韓国語晋州方言に関しては、従来「N型アクセント」としてアクセント型の対立は5つみられる「5型アクセント」と報告されているものがあるが、新たな調査と分析を通して現在型の対立が4つに減っていることを確認した。

(3) 平成24年度

「アクセント・トーンの中和」を重点テーマに掲げて共同研究を進めた。研究の成果は国際会議ICPP 2013（平成25年1月）をはじめとする国内外の学会・会議で発表し、また国内外の研究誌に投稿した。上記の重点テーマに関する英文論文集を出版する準備を開始した。各分野の研究実績は次のとおりである。

日本語については鹿児島方言、甌島方言、琉球方言、越前方言を中心に調査分析を進めた。鹿児島方言については、若年層の1音節語の単独発音においてアクセント中和が進んでいることと、中高年層においても疑問文や呼びかけ文においてアクセント型の区別が失われる環境があることを明らかにした。琉球方言については、アクセント調査を効果的に行うための基礎語彙を提案するとともに、その語彙を用いて宮古島の一部の方言を調査し、その結果を発表した。越前方言については、福井県南越前町（旧河野村）と越前町厨のアクセント調査を行い、これまで報告されている3型アクセントの南限が旧河野村河野までで、それ以南の内陸部には今庄アクセントが分布していることと、南越前町糠のアクセントは報告のある越前町小樟のアクセントと異なる体系をもち、更に古いタイプの可能性があることを明らかにした。甌島鹿児島方言については、2型アクセントの中でも特異な性格をもち、若い世代には一部の対立を失う1型化の傾向が見られるが、今回はそれらのアクセント型の確定のために項目を追加して調査した。

アフリカの言語についてはウガンダ西部のニョロ語（バンツ系）について現地調

査を行い、その南側で話される1型アクセント体系のトーロ語とは異なって、最後の音節がHになるものと終わりから2音節目がHになるものの2種類のパターンがあることを明らかにした。ただし、いずれのパターンにおいてもHが前にずれる傾向があり、これはとりわけ単独形では強いことも明らかとなった。

中国語については、諸方言のTone sandhiについて方言ごとに分析しながら、声調中和の観点から漢語方言全体を見通せる類型化とその根拠を提示した。

(4) 平成25年度

「アクセント・トーンの変化」を重点テーマに掲げて共同研究を進めた。研究の成果は国際会議 3rd ICPP（平成25年12月）をはじめとする国内外の学会・会議で発表し、また国内外の研究誌に投稿した。上記の重点テーマに関する英文論文集を出版する準備を開始した。各分野の研究実績は次のとおりである。

日本語については鹿児島方言、甌島方言、琉球方言、越前方言の調査分析を行った。鹿児島方言については、若年層にみられるアクセントの変化を分析し、それが標準語との接触によるものであることを明らかにした。甌島の諸方言については、鹿児島方言においてアクセントのゆれの確認とともに、動詞アクセントも加えて調査した。また瀬々野浦方言、長浜方言は、報告のある手打方言タイプと類似のアクセントをもつが、韻律を担う単位に異なりがあることが明らかになった。琉球諸方言については、宮古諸島、石垣島などの八重山諸島に焦点を絞ってアクセント規則を明らかにするための調査を行った。その結果、多良間島、宮古島と那覇などの宮古島諸地域のアクセントの記述には、モーラや音節より大きい単位（「韻律語」）を想定する必要があることを発見した。福井県越前方言については、越前町海岸部南部の調査を行い、越前町梅浦以南は無アクセントが分布しており、3型アクセントは旧上岬村には及んでいないことが明らかになった。

アフリカの言語については、ニョロ語動詞の変化形の声調を集中的に調査した。名詞では基底において、最後の音節がHになるものと終わりから2音節目がHになるものの2種類があり、それぞれ単独形では...HFと...FL、そして後に何かが続くと...LH、...HLと実現されるが、動詞の変化形ではパターンは2種類であるものの、後に何かが続くとHが全く消えてしまう活用形があり、音韻論では処理できない統語的規則が働いていることを明らかにした。

中国語についてはTone sandhiの通時的背景について方言データの蓄積と分析を進めた。特に文脈依存型の合流（共時的には中和）について調値変化との関連性を考察した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計32件)

梶 茂樹、ニヨ口語の婉曲・比喩表現、アジア・アフリカの言語と言語学、査読有、8、2014、pp. 201 - 235

松森 晶子、多良間島のアクセント規則を再検討する、日本女子大学紀要 文学部、査読無、63、2014、pp. 13 - 36

Haruo Kubozono、Japanese word accent、Oxford Bibliographies Online、査読有、2013、<http://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780199772810/obo-9780199772810-0103.xml?rkey=VYb6MQ&result=1&q>

窪園 晴夫、自然条件とことばの変化 甌島方言を例に、アジアの人びとの自然観をたどる、査読無、2013、pp. 157 - 183

Shigeki Kaji、Multi-language Use and Lingua Franca Use: Two Strategies for Coping with Multilingualism in Africa、African Study Monographs、査読有、34(3)、2013、pp. 175 - 183

Shigeki Kaji、Monolingualism via Multilingualism: A Case Study of Language Use in the West Ugandan Town of Hoima、African Study Monographs、査読有、34(1)、2013、pp. 1 - 25

松森 晶子、宮古島における3型アクセント体系の発見 与那覇方言の場合、国立国語研究所論集、査読有、6、2013、pp. 67 - 92

松森 晶子、宮古島与那覇方言のアクセント交替、日本女子大学紀要 文学部、査読無、62、2013、pp. 1 - 21

Haruo Kubozono、Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese、The Linguistic Review、査読有、29、2012、pp. 109 - 130

窪園 晴夫、鹿児島県甌島方言のアクセント、音声研究、査読有、16(1)、2012、pp. 93 - 104

Haruo Kubozono、Varieties of pitch accent systems in Japanese、Lingua、査読有、122、2012、pp. 1395 - 1414

梶 茂樹、アフリカ人のコミュニケーション - 音・人・ビジュアル -、言語研究、査読有、142、2012、pp. 1 - 28

梶 茂樹、ニヨ口語の挨拶表現、アジア・アフリカの言語と言語学、査読有、7、2012、pp. 81 - 120

松森 晶子、琉球調査用『系列別語彙』の素案、音声研究、査読有、16(1)、2012、pp. 30 - 40

松森 晶子、西日本における『昇り核』の方言：鳥取県青谷町とその周辺地域のアクセント体系、国立国語研究所論集、査読有、3、2012、pp. 19 - 37

新田 哲夫、福井県越前町小樟方言のア

クセント、音声研究、査読有、16(1)、2012、pp. 63 - 79

梶 茂樹、テンボ語、アフリカ諸語文法要覧、査読有、2012、pp. 157 - 168

梶 茂樹、多言語使用による一言語状態 ウガンダ、ホイマ市における社会言語学的アンケート調査から、多言語主義再考 多言語状況の比較研究、査読有、2012、pp. 595 - 633

岩田 礼、Map 43-1 Sibilants initials system、Map 43-2 Retroflex Initials、岩田 礼 編『漢語方言解釈地図/The Interpretative Maps of Chinese Dialects』、査読無、2、2012、pp. 144 - 147

岩田 礼、聲調調値演變的の微觀探討：以江蘇東北角の方言為例、Chin-Chuan Cheng (Ed), Micro Views of Language Variation in Time and Space (語言時空變異微觀) 査読有、2012、pp. 225-251

② Yeonju Lee、The Accent System and Phrasal Pitch Features in Middle Korean - Compared with the Accent Systems of Modern Gyeongsang Dialects -、Journal of the Graduate School of Letters, Hokkaido University、査読無、7、2012、pp. 55 - 65

② 窪園 晴夫、アクセントとイントネーション 日本語の多様性、人間文化、査読無、13、2011、pp. 11 - 16

③ 窪園 晴夫、日本語の促音とアクセント、国語研プロジェクトレビュー、査読無、6、2011、pp. 3 - 15

④ 窪園 晴夫、喜界島南部・中部地域のアクセント、国立国語研究所共同研究報告、査読無、11 - 01、2011、pp. 51 - 70

⑤ 松森 晶子、数詞のアクセントを通して見た喜界島語彙の音韻特徴、国立国語研究所共同研究報告、査読無、11 - 01、2011、pp. 123 - 137

⑥ 松森 晶子、日本語のアクセント、城生 伯太郎・福盛貴弘・斎藤純男(編)『音声学基本事典』、査読有、2011、pp. 500 - 512

⑦ 松森 晶子、隠岐島五箇方言の『式保存』とその例外について、音声研究、15(3)、査読有、2011、pp. 74 - 75

⑧ Haruo Kubozono、Japanese pitch accent、The Blackwell Companion to Phonology、査読有、5、2011、pp. 2879 - 2907

⑨ 松森 晶子、喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙 赤連と小野津の比較から、日本女子大学紀要 文学部、査読無、60、2011、pp. 87 - 106

⑩ Kubozono Haruo、Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese、Lingua、査読有、120、2010、pp. 2323 - 2335

⑪ Shigeki Kaji、A Comparative Study of Tone of West Ugandan Bantu Languages, with Particular Focus on the Tone Loss in Tooro、ZAS Papers in Linguistics、査読有、53、

2010, pp. 99 - 107

⑳ 梶 茂樹、未知の言語の調査法 アフリカの言語の場合、日本語学、査読無、29(12)、2010、pp. 58 - 66

[学会発表](計32件)

Haruo Kubozono、Accent changes in Kagoshima Japanese due to dialect contact、3rd International Conference on Phonetics and Phonology、2013年12月21日、国立国語研究所

窪園 晴夫、鹿児島方言におけるアクセントの変化、日本言語学会、2013年11月24日、神戸市外国語大学

窪園 晴夫、甑島方言の2型アクセント、日本音声学会(招待講演)、2013年9月29日、金沢大学

新田 哲夫、越前海岸のN型アクセント、日本音声学会、2013年9月29日、金沢大学

吉田健二、新田 哲夫、石川県白峰方言アクセントの下降強化と音調型対立の中和、日本音声学会、2013年9月28日、金沢大学

松森 晶子、宮古島与那覇方言のアクセントと3拍のフット、Phonology Festa 2013、2013年2月17日、ホテル木もれび

Haruo Kubozono、Tonal neutralization in Kagoshima Japanese、International Conference on Phonetics and Phonology 2013、2013年1月27日、国立国語研究所

Kenji Yoshida、Tetsuo Nitta、The source of reinforcement of pitch fall in kakoo-shiki in the Shiramine dialect of Japanese、International Conference on Phonetics and Phonology 2013、2013年1月27日、国立国語研究所

Ray Iwata、On the context dependent/independent tonal neutralization in Chinese dialects、International Conference on Phonetics and Phonology 2013(招待講演)、2013年1月26日、国立国語研究所

Haruo Kubozono、Diversity of pitch accent systems in Japanese、Institute of Linguistics Colloquium(招待講演)、2012年12月4日、Academia Shinica, Taiwan

窪園 晴夫、鹿児島方言におけるアクセントの中和、日本言語学会145回大会、2012年11月25日、九州大学

Akiko Matsumori、Synchronic and Diachronic Issues in Ryukyuan Phonology、International Workshop on Endangered Dialects(招待講演)、2012年10月11日、国立国語研究所

Haruo Kubozono、Word-level versus sentence-level prosody in Japanese、6th Conference on Formal Approaches to Japanese Linguistics(招待講演)、2012年9月27日、ベルリン・フンボルト大学

窪園 晴夫、レキシコンと音声研究 アクセント研究を中心に、関西言語学会第37

回大会、2012年6月2日、甲南大学

窪園 晴夫、日本語の変容、方言の変容、国際学会「新しい日本語」、2012年3月9日、パリ第8大学

李 連珠、韓国語晋州方言のアクセント、北海道大学 2012 音声学・音韻論ワークショップ、2012年3月7日、北海道大学

Haruo Kubozono、Mikio Giriko、Where does loanword prosody come from? Analysis of alphabetic acronyms in Japanese dialects、International Conference on Phonetics and Phonology、2011年12月13日、Kyoto University

梶 茂樹、多様なコミュニケーションのあり方を求めて アフリカでの経験から、日本言語政策学会、2011年12月3日、京都光華女子大学

窪園 晴夫、借用語音韻論に見られる普遍性と個別性、日本英語学会第29回大会、2011年11月13日、新潟大学

Haruo Kubozono、Varieties of pitch accent systems in Japanese、International Workshop on Tone and Intonation、2011年9月23日、Radboud University Nijmegen, The Netherlands

㉑ Haruo Kubozono、Accent changes in the past and present: Implications of fieldwork studies for historical changes in Japanese、2011年7月29日、国立民族学博物館

㉒ Akiko Matsumori、The accentual system of Tokunoshima Okazen dialect in which the accent is uniquely marked with vowel duration、The 20th International Conference on Historical Linguistics、2011年7月29日、国立民族学博物館

㉓ 梶 茂樹、ウガンダ・ホイマ市の言語使用状況 社会言語学的アンケート調査から、日本アフリカ学会、2011年5月22日

㉔ 窪園 晴夫、鹿児島県甑島方言のアクセント規則、国立国語研究所主催公開シンポジウム「N型アクセントの原理と成立」、2011年5月21日、神戸大学

㉕ 松森 晶子、隠岐島3型アクセントの再解釈、国立国語研究所主催公開シンポジウム「N型アクセントの原理と成立」、2011年5月21日、神戸大学

㉖ 新田 哲夫、福井周辺部のN型アクセント、国立国語研究所主催公開シンポジウム「N型アクセントの原理と成立」、2011年5月21日、神戸大学

㉗ 梶 茂樹、言語調査は、音声学・音韻論から始めるのか、第6回音韻論フェスタ、2011年2月17日、ホテル木もれび

㉘ Haruo Kubozono、Accent of the Koshikijima Japanese、International Symposium on Accent and Tone、2010年12月19日、国立国語研究所

㉙ Tetsuo Nitta、On the accent of the Shiramine dialect in Japan、International

Symposium on Accent and Tone、2010年12月19日、国立国語研究所

⑩ Yeonju Lee、The accent system and phrasal pitch features in Middle Korean、International Symposium on Accent and Tone、2010年12月19日、国立国語研究所

⑪ 新田 哲夫、白峰方言の音調体系、第1回国際地理言語学会、2010年11月21日、北京語言大学

⑫ Haruo Kubozono、The Phonetics and Phonology of Tone in Koshikijima Japanese、International Phonetic-Phonology Conference、2010年5月29日、上海外国語大学

〔図書〕(計4件)

窪園 晴夫・竝木 崇康・小野 尚之・杉本 孝司・吉村 あき子、くろしお出版、日英対照 英語学の基礎、2013、211

松森 晶子、新田 哲夫、木部 暢子、中井 幸比古、三省堂、日本語アクセント入門、2012、223

窪園 晴夫、岩波書店、数字とことばの不思議な話、2012、211

松森 晶子、李 連珠 他、明治書院、日本語研究の12章、2010、521

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/kubozono/>

<http://www.ninjal.ac.jp/organization/researcher/01/01-3/kubozono/>

<http://www.ninjal.ac.jp/phonology/IntICconference/isat/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

窪園 晴夫 (KUBOZONO, Haruo)

国立国語研究所・理論・構造研究系・教授
研究者番号: 80153328

(2) 研究分担者

梶 茂樹 (KAJI, Shigeki)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号: 10134751

岩田 礼 (IWATA, Ray)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 10142358

松森 晶子 (MATSUMORI, Akiko)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号: 20239130

新田 哲夫 (NITTA, Tetsuo)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 90172725

李 連珠 (LEE, Yeonju)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号: 50361548